２０１７年度活動報告

＜事業の概要＞

２０１７年度は、本格的な学外学修の提供が始まりインターンシップ、サービスラーニング、インデペンデントスタディの活動に延べ２７６名の学生が参加した。

学生への周知
～学外学修の説明会を開催～

前年度に引き続き、新学年暦に関する説明会および学外学修の個別の説明会を開催し、ギャップターム活用法や参加できるサマープログラムやインターンシップ、ボランティア活動を紹介。

２０１７年度実績

・学外学修の説明会（延べ１，１５３人参加）を４～１１月の間に開催。

・インターンシップ参加者 104 人

・サービスラーニング参加者　54 名

・インデペンデントスタディ参加者 116 名

学外学修活動の実施に向けて
～学外学修センターのワンストップ化～

主にギャップターム期間を活用し、自律的に学外で学修する活動ためのサポート体制を構築。サマースクールやインターンシップ、ボランティアなどの異なる学外学修への申込みを学外学修センターに一元化して、学生サービスの向上を図った。

2017 年度実績

・ポータルサイト本格運用開始。

・学外学習センターの体制を充実

（特任教員２人、事務職員２名体制でスタート）

・各種大学提供プログラム実施

学外学修活動の事前・事後学修の支援・指導を通して、学外での学びと定着を図る

学外学修活動の事前・事後学修に「学外学修コンパス」を使用し、学生が学んだ力や成長を可視化し、定着を図った。

２０１７年度実績

・学外学修の評価軸となる「学外学修コンパス」を作成

・インターンシップ、サービスラーニング、インデペンデントスタディへの参加者に事前・事後学修をおこない、単位（随意科目）認定を行った。

２０１８年度以降の計画

２０１８　事前・事後学修の更なる改善（正課授業へのシナジー効果）

紹介プログラムの見直し・検討

ポータルサイトの充実・学外学修システムの改修

＜取り組みに対する内部評価＞
実 施 日： ２０１７年１２月
評 価 者： 学長補佐、学生委員長、教務委員長、国際センター長
実施方法
事業実施報告書を事前に配付し、同資料に基づき３つの観点から評価・改善点を報告
評価概要

①組織の運営や連携体制について

（評価点）

学外学修センターを中心とする運営が機能している点、学外学修に関わる他部署と一定の連携がとれている体制になっている点、以上２点に関して複数の委員から評価を得た。また学外学修センターの活動が短期間に確立され、学生の諸活動に大きな役割を果たしている点についても評価を得た。

（改善点）

関連する諸部署との更なる連携強化や今後の運営体制に対する大学方針の検討、また学生側の意見にも耳を傾け反映すべきとの指摘を頂いた。

②学外学修プログラムの具体的な取組（学年暦変更、学外学修センター設置、カリキュラム見直し）による学外学修環境の実現性について

（評価点）

学年暦の変更によりギャップタームを使って予想よりも多くの学生が学外学修をおこなった点や、学外学修センターの設置、カリキュラムの見直しを図った事が学外学修の奨励に機能しているとの評価を得た。

（改善点）

学外学修に積極的に取り組んだ学生とキャンパスに留まった学生の理由と成果などが分かると良い。
また、学年暦の変更により大きなデメリットとして、９月に実施されるインターンシップに参加しにくくなってしまった点は、今後の大きな課題と指摘を頂いた。

③学外学修（インターンシップ、インデペンデントスタディ、サービスラーニング）の実施取組について

（評価点）

学外学修の実施初年度としては、予想以上の学生（全体の１割弱）が学外学修プログラムに取り組んだ事に対し評価を得た。また、学生が自ら情報を収集して活動先を決めたケースの割合が３割と比較的高い事も同様に高い評価を得た。

（改善点）

学生自らの関心に基づいた活動をサポートするという考え方は良いが、学外学修に興味を持っていない学生も少なくないと考えられるので、学外学修の意義や可能性をこれまで以上に提示していく必要があるとの指摘を頂いた。

＜取り組みに対する外部評価＞
実 施 日：２０１７年１２月１８日
実施方法：事業実施報告書を事前に配付し、同資料に基づく質疑・応答
評 価 者：他大学教員２名、企業関係者１名
評価概要

①組織の運営や連携体制について

（評価点）

学外学修センターと他部署との連携体制を確保するために、本組織「学外学修センター」の運営委員会の委員に、副学長以下、国際センター、学生生活課、教務関係の経験のあるスタッフを入れて各組織との意思疎通を円滑にした点を評価頂いた。

（改善点）

学外学修の為の機会提供・環境整備だけでは不十分であり、学生のスキル・思考力向上や、学内学修とのシナジー創出にも支援体制を十分に構える必要性がある。学生支援と、センター運営で役割分担をする等、必要スキル向上策への注力体制は一向の余地があるとの指摘を頂いた。
また、学外学修事業に参加する学生数に対して教員数が不足しているのではないかといった点や、事業終了後の具体的な運営体制が曖昧な点を指摘頂いた。

②学外学修プログラムの具体的な取組（学年暦変更、学外学修センター設置、カリキュラム見直し）による学外学修環境の実現性について

（評価点）

学年暦として新しいターム制の導入を全学的に行った点について評価を得た。また、学外学修センターの設置は、本プログラムの推進母体として必要不可欠であり、その運営委員会の構成を含めて評価頂いた。また、カリキュラム変更に着手している点についても評価を得た。

（改善点）

カリキュラム改編によるギャップタームの実効性をより具体的にする事が必要との指摘を頂くと共に、カリキュラムの見直しについては、既存の授業と本事業を組み合わせた形での見直しの提言を得た。また、学年暦の変更により９月上旬の授業と昨今のインターンシップ実施時期の重複について指摘を頂いた。更に、学外学修センターと国際センターの役割分担を明確にすると共に、近い将来に、学外学修センターと国際センターの統合ないし有機的結合を図る事が望ましいとの指摘を頂いた。

③学外学修（インターンシップ、インデペンデントスタディ、サービスラーニング）の実施取組について

（評価点）

学生が企画したケースが約３割に達している点について評価頂いた。また、提供する科目を３つのカテゴリー（インターンシップ、インデペンデントスタディ、サービスラーニング）に分けて整理して管理するシステムは、学生にとってもわかりやすいという点で評価を得た。また、特にインデペンデントスタディというユニークな試みを評価頂いた。

（改善点）

事後報告書のフォーマット、活用方法について改善の指摘を得た。学外学修への参加前と参加後でどのように変化したのか、今後の学習や進路にどう活かすか、また受入先からのフィードバックを入れ込むなどの改善提案を得た。また、大学が提供しているインデペンデントスタディについては、受入機関が欧米に偏っている為、

欧米以外の積極的な開拓が必要との指摘を頂いた。

これらの内部評価・外部評価の結果を踏まえ、特に内部・外部共に指摘を受けた事項を優先課題として改善を図っていく。具体的には、「①組織の運営や連携体制について」の改善としては、学外学修センターと他の関連機関（国際センターや学生生活課）との連携の強化もしくは有機的な結合を検討する。「②学外学修環境の実現性について」の改善として、９月上旬に行われるインターンシップへの参加が難しくなっている点について、学年暦、授業実施日、大学行事（入試や長期休み）など様々な観点から問題の解決の可能性を検討して行く。最後に「③学外学修の実施取組について」の改善としては、事後報告書のフォーマットの改善から始まり、学外学修を経験する事により「複雑化する社会問題を解決する為の思考力・想像力・実行力」といった力を醸成させる為の仕組みを検討していく。具体的には、「思考力等の向上」「学内学修とのシナジー創出」に向けて、特にカリキュラムの見直しが有効であるとの提言も頂いているため、学外学修で培った力を伸ばす為の実践的な授業や専門的な知識を学ぶ授業と結び付け、学外学修と学内学修（正課授業）とのシナジーの創出といったカリキュラムの作成を目指す。

以上